

17-18 世紀のフランス語における単純過去と複合過去

—手紙コーパスに基づく検討—

中川 亮

発表要旨

本発表は、17-18 世紀における単純過去(PS)と複合過去(PC)の使用状況について、手紙文から収集した用例の頻度に関する統計的分析と綴りの質的分析を通じて明らかにする。

現代フランス語の話し言葉における一般的な過去の時制は PC であり、PS はまれである。しかし、PC はもともと過去の事態から生じた現在の状態を表し、現在完了や過去を表す用法が一般化して PS を置き換えたのは近世・近代以降である(Labeau 2022, 66-75)。

PS の衰退はインフォーマルなレジスターで進んだことから、その典型例としてこの時期の手紙文がこれまで検討されてきた。しかし、既存研究(e.g., Galet, 1977, Caron & Liu 1999)は、サンプルに偏りがあり、少数の貴族や知識人しか検討されていない。また、頻度の情報や、PS/PC の選択に関わる要因、たとえば時の副詞句や人称の分布状況が個別のあるいは部分的にしか与えられておらず、使用の全体像がはっきりしない。

そこで、本研究では手紙コーパス Corpus Macintosh(Bergeron-Maguire, 2024-)と Caillouel 家資料(Huguenot Library, UCL Special Collection)の発表者による転写を用い、当時の手紙における PC と PS の分布をより包括的に捉えることを試みる。これらのコーパスは、商人や植民地入植者といった従来研究がカバーしていない話者を含み、代表性の問題を改善できる。また、本研究は Yao (2024)を踏襲して複数の固定効果(人称・動詞タイプ・否定・時の限定)と話者レベルのランダム効果を投入した一般化線形混合モデルによる分析を実施し、PS/PC の選択に各要因が与える影響の大きさも推定する。加えて、手紙コーパスの一次資料にみられる綴りも検討する。これらの資料では、貴族や学者などの手紙ではみられない非標準的綴りが多く含まれる。こうした非標準的綴りが、PS と PC、もしくはそのほかの時制との区別を中和し、それが PS の衰退に関与した可能性を指摘する。

引用文献

- Bergeron-Maguire, M. (2024-), Corpus Macintosh, CLESTHIA, Sorbonne Nouvelle.
<https://lettres-outr-mer.huma-num.fr/> (2025 年 9 月 11 日閲覧)
- Caron, P., and Liu, Y.-C. (1999), “Nouvelles données sur la concurrence du passé simple et du passé composé dans la littérature épistolaire”, *L'information grammaticale* 82-1, 38-50.
- Galet, Y. (1977), *Les corrélations verbo-adverbiales, fonction du passé simple et du passé composé, et la théorie des niveaux d'énonciation dans la phrase française du XVII^{ème} siècle* (Vols 1-2), Thèse de doctorat, Université de Paris X.
- Labeau, E. (2022), *The Decline of the French Passé Simple*, Brill.
- Yao, X. (2024), *The Present Perfect and the Preterite in Late Modern and Contemporary English. A corpus-based study of grammatical change*, John Benjamins.